

地域教育中予ブロック集会報告書 (文部科学省委託事業)



平成29年2月18日(土) 12:50~16:30
於：にぎたつ会館 1階 芙蓉の間

主催 地域教育中予ブロック集会実行委員会

共催 地域教育実践交流集会

後援 愛媛県 愛媛県教育委員会 「えひめ教育の日」推進会議

地域教育中予ブロック集会(文部科学省委託事業)開催要領

- 1 趣 旨 中予管内において子どもを取り巻く課題解決、地域の教育力の向上、あるいは地域課題の解決等に向けて日々奮闘している人たちが、「かかわりをチカラに、つながりをカタチに」を合言葉に元気を分かち合い、新たな展望を抱ける場を設ける。特に、次代を担う新・旧若者たちが自発的・積極的に人・もの・こととつながりながら共に地域づくりを進めていく取組の活性化を図る。
- 2 日 時 平成 29 年 2 月 18 日(土) 12:50~16:30
- 3 場 所 道後にぎたつ会館 1階芙蓉の間 松山市道後姫塚 118-2
- 4 主 催 地域教育中予ブロック集会実行委員会
- 5 共 催 地域教育実践交流集会実行委員会
- 6 後 援 愛媛県 愛媛県教育委員会 「えひめ教育の日」推進会議
- 7 内 容

12:20	12:50	13:00	14:15	15:30	16:30
受 付	開 会 行 事	講 演 タレント らくさぶろうさん 休憩	大学生の実践発表 (3本) 休憩	グループ別協議 (同一フロアで3 カ所)	全 体 会 閉 会 行 事

- 開会挨拶 地域教育中予ブロック集会実行委員会委員長
- 講 演 タレント らくさぶろう さん
テーマ:「笑いは地域を救う！」
- 実践発表
 - (研究活動)愛媛大学法文学部・社会共創学部井口研究室 竹本 萌香さん
 - 〃
 - 久保 葵さん
 - (NPO活動)松山大学学生地域創造研究所 Muse 学生代表 中村 麻祐さん
 - (個人的活動)愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程学生 宇津 博美さん
- グループ別協議
 - <ファシリテーター(進行役)>
 - 愛媛大学社会連携推進機構教授(地域連携コーディネーター) 前田 眞 氏
 - 愛媛ボランティア学習研究会事務局長 柴崎 あい 氏
 - 年輪塾小番頭 松本 宏 氏
- 全体会(各グループの協議内容の共有)
- 閉会挨拶 地域教育中予ブロック集会実行委員会委員長

8 参加費 500 円 但し学生は無料

9 参加申込み

申込み方法:所属と氏名を明記し、中予教育事務所(社会教育主事 大森)あてメール
送信 アドレス:oomori-shigeki@pref.ehime.lg.jp

締 切:平成 29 年 1 月 31 日(火)

講演

講師： タレント らくさぶろう さん

演題： 笑いは地域を救う！



【講演内容】

私はPTAはしておりますけれど、意識を高くもって活動しているというわけでもございません。今日は、1時間お時間をいただいておりますが、後半は会話形式といいますか、そういうな形で進めて、私も非常に興味のある世界でございますので、少し勉強させていただき、お仲間に加えていただきながらお話しをしていけたらと思っております。

テーマのとおり、「笑いは地域を救う」ということで、私の場合は、今講演に関しては学校を回ったり、保健、健康づくりとかが多く、専門分野である言葉の大切さ、日本語の美しさ、楽しみ、逆にマイナスの面なども話したりしています。

小学4年生の教科書に落語が登場しており、今頃の子どもたちは恵まれていますよね。地域の方々の専門の遊びや勉強を教えてもらったり、音楽の専門家や講演などでいろいろな人に来てもらったり、学校がずいぶん開かれてきています。ぼくたちの頃って、よそから来て何かされることは年に1回人権の劇が来ていたくらいだと思います。東京や大阪からプロの噺家と呼ぶとなると飛行機代だけで5万円くらいかかるため、こちらに住んでいる私に声がかかってきます。学校に行ったときは、やっぱり1年生と6年生では全く人間自体が違う感じの成長ぶりなんで、笑いや言葉となると悩ましくなります。1年生とかは退屈になるとすぐ足をぶらぶらさせたり横の友達と話したりするのでこちらも退屈なんだろうと感じ、逆に1年生に分かりやすい話をするので6年生が退屈そうな顔をしてどうしたらいいかと思ひ悩みながらしています。だから、途中「ハトが何か落としていったよ。」「ふーん」っていうような小話を入れながらしているんです。本当にしょもないでしょ。これはまだいいんですが、つぎの小話で決定的に反応が分かる。「お母さん、パンツやぶれたよ」「またかい。」あえてやるんですよ。そしたら、1・2年生はパンツという言葉だけで、ギャハハハとなります。これ、どの学校に行っても10割、100%ですね。6年生とかは何がおかしいんやろという感じですが、「またかい」というおちがついて、やっと「あ～あ」と反応がある。4年生に落語をもってきているというのはすごく研究されて、ちゃんと4年生くらいなら、言葉の面白さ、おちがわかる。さすがに教科書をつくる人というのはちゃんとされていると思います。子どもは正直で面白くなければ本当に笑いません。皆さんは気を使えるでしょ。面白くなくても笑える。というのは私この後八幡浜で別の仕事があるんですけども、八幡浜に落ち込んだ気分で行かさないでください。子どもは非常に正直で、でも4年生になると言葉のあやといいますか、おちでわかるとぶわっと顔色が変わる。落語とか言葉のおちとか子どもたちの様子はどうかなど思っている時に、先生方から「あんなに笑った子どもというのはなかなか見ないです」という言葉をかけていただくとおあやってよかったと思います。大体最後に児童会長の男の子や女の子があいさつをしてくれるんですね。女の子の方が結構多いですね。「今日は大変お忙しい中私たちのためにお越しいただきましてありがとうございます。私は落語を見るのが初めてで、とっても面白くて、もう少しで笑いそうになりました」。笑えっちゅうにと思えますよ。

あと、うれしいのが私、愛媛大学の落語研究会の出身なんです。教育学部の出身といわないところが

いいでしょ。後輩が噺家に何人もなっているんですよ。東京で真打になっている噺家がいったり、大阪では桂文枝さん、もと三枝さん、いらっしゃーい、あの方の弟子になっている方もいたり。それが桂三幸、三つの幸せ、三枝さんの三と本名の幸せをとって。すごくいい名前をもらっている彼は、こっちに仕事で帰ってくる時には必ず連絡してくれます。というのが、ぼくも学校に行くのが好きなので、必ず彼が帰ってきたら前後どちらかにぼくも一緒に行くんです。悲惨でしたね、この前。彼言われていました。4年生の男の子が、「らくさぶろうさん、テレビのコマーシャルとかラジオで頑張ってください。」「三幸さんはとても落語がお上手でしたので、早くプロになればいいと思います。」子どもは正直です。私の子どもは中学校3年生で受験なんです。この前も高校決めないかんで、どことは言いませんけれどもやっと高校決めたんです。彼は彼なりに悩んでいたんやなあと思いました。皆さん、中3の頃、男性の学生さんも来ておられますけれども、お父さんとペラペラ話さんかったんやないかなあと思うんです。うちの子がよく言う口癖が「ふつう」。6年生の修学旅行で「どやった、九州のスペースワールドは」「ふつう」「ふつうってなんや、もっと言い方あるやろ」「別に」って言われて。腹たちますけれども、まあ、ぼくもそやったんかなと思います。

ぼくも地域の活動に関わり、最初はPTAも特にこっちから望んでやる気はなかったんです。でも、学校は好きですので、子どもが小学校の時当時のPTA会長さんは超有名な中村和憲さんでした。別の方面で知っていましたので、「中村さん、お世話になっています。ぼくにできることがあったら何でも言ってくださいね」と伝えました。ぼくにできることというのは、子どもたちに言葉遊びを教えたり落語とかそういうことを言ったつもりだったんですけども、子どもが3年生になるときに電話がかかってきて、「副会長お願いします」と言われて「はあっ」て、なりました。できることってそうじゃないんですけどもみたいな。そうじゃないんですとは言わなかったんですけど、でも、PTAってやってみようかなあと思って、そこで全然断りもせず、子どもたちに学校で別の形で関われるのは非常にぼくはうれしいことだなと考えました。それから積極的にやらしていただき、4・5・6年生と小学校のPTA会長、今は中学校のPTA副会長をさせていただき、中学3年生ですからもう最後なんですけれども、3・4・5・6・1・2・3と7年間すごく充実しておりました。よく言われます。らくさぶろうさんみたいに忙しい人がようそんなにPTAの役員なんかできますね。いえいえ、何をおっしゃいますやら。皆さん一緒じゃないですか。お母さんだって朝から晩まであれだけ、家事育児に追われながらの活動で、男の人だってそれぞれ自分の職業があってされているわけです。そのかわり、来れないときには来ませんよ。小学校から中学校への連携といいますか、「できる人ができるときにできることをする」というくくりでやられているから、やりやすくなるんですね。皆さんも地域に関わられることってそういうスタンスの人が多いいと思います。本当にボランティアといいますか、進んで関われることがあると思います。そこで無理をしても何の得にもならないのでぼくはこのスタンスは地域づくり、まちづくりに非常にいい言葉ではないかなと思います。ストレスをためてやることでもないし、できる分野やそれぞれの専門の分野、また学生さんなら学生さんでできることをやる。ぼく51歳ですけども、20代の人々の発想とはまた違います。今の学生はしっかりしているなど思うこともありますし、こんなことを考えているんやと思うこともずいぶんあります。この後でぼくの弟子ひめさぶろうも来ておりますのでちょっと出します。普段厳しいこと言っているんですけども、こんなことも考えれるんやと、そんなことも感じています。地域づくりにおきましても、それぞれの人の関わり方っていうのがぼくはベストではないかとPTAをやっている感じしております。

私、生まれは大洲なんです。すごい田舎でね。本当に笑うような山の中で、ど田舎。うちの家は養蚕農家でございました。お蚕さん、今ね、子どもたちにはなかなかわからないですよ。特に小学生なん

かにぼくの生い立ちを説明するときに、虫の絵をかいて説明するんです。まあ芋虫みたいなものです。これが糸をはいて着物の1本1本になっている糸になるんよというふうに説明するんです。うちのおやじは12人兄弟の2番目、中学卒業する前に、親から「お前は下に10人もおるから、高校なんかに行ってもらっては困る。働いてもらわねばいかん」ということだったようですが、おやじはラッキーと思ったらいいですね。勉強があまり好きではなかった。そこで、手に職をつけようということで松山に出てきて、ある組に入りまして。左官。今の子どもたち、大工はわかりますが、左官はわからない。だから左官になりたいという子どもたちは1人も聞いたことない。今、家の建て方が変わっていますから、ほとんど壁塗らんようになりましたが、おやじは左官の壁塗りの仕事に就きました。おふくろは養蚕農家の一人娘で、まあまあ勉強ができたらしいんです。看護婦になりたいということで中学卒業する前に高校に行きたいと言いましたら、うちのじいちゃんが「農家の娘が高校なんか行かんでええ」ということで、泣く泣く高校をあきらめました。ですからうちのおやじとおふくろは中卒なんです。ぼくが生まれたときに、おふくろはぼくを手にして高校だけは行かせてやりたいという風に思ってくれたらしいです。おやじの仕事の関係で松山に出てきて、自分で言うのもあれですけども勉強がまあまあできたんです。すごくできていたんです。私立中学を受けたんですよ。残念ながら当日は試験問題と意見が合わず、戦力外通告を受けました。

そして、市内のマンモス校の中学校、1学年が12クラスという今では考えられないような学校に入りました。今でも部活が有名で結構強いんですけども、当時も何かには入らないかんということで、結局、吹奏楽部に入りました。ぼくは幼い頃から多分目立ちたがりというか、人前で何かやったりするのが好きやったんです。おひぎりさんののど自慢に出て優勝してみたりね、好きだったんですよ。それで何か目立つ楽器がええと、きょろきょろして見つけたのが、2年生の先輩が夕日に向かって吹いていたトランペットだったんです。かつこええなあ。すぐ希望にトランペットって書きました。すると、トランペットの希望者は多いんで、先生に一人一人順番に音楽準備室に呼ばれました。その時、先生からいきなり「君は向いてないなあ」と言われました。先生に会ってからまだ5秒しかたっていないですよ。なぜですかと聞いたら、唇が君はちょっと分厚すぎるといってました。吹部をご経験の方はわかるとは思います。適材適所があるんです。ぼくみたいなこのたらこ唇、分厚いでしょ。これはトランペットには向いてないんです。じゃあぼくは何をやらしてもらえませんかと聞くと、チューバというのを指さされました。ぼくの体の1.5倍ぐらいあるような男の先輩が、ほっぺた膨らませて吹いてる楽器がそのチューバだったんです。どんな音するんやろ、「ブォー」関西汽船が出ていきそうな、なんかつまらなそうやなと思いつつ、それでもいやですとも言えずに、やったんです。でも、今となってはやってよかったな一と思っています。松山市教育委員会からの委嘱といいますか、10年くらいいじめ問題がいじめ問題と命を考える研究会というので松山市内の小中学校を年何校か回っています。その時にもお話するんですけども、ぼくらみたいな低音楽器とか打楽器というのが一番下で支えている。ここにトロンボーンとかホルン、サクソフォーンとかだんだん音が高い楽器がのっかっていき、一番上でフルートとかピッコロとか音の高い楽器がいて、こういうピラミッド型の音楽っていうのが一番安定しているんです。運動会の組体操で下のでっかい人がきちんと支えてやらないと倒れてしまうように、ぼくらが低音で幅の広い音で支えてやるわけです。ぼくらはそう目立つ楽器ではなかったですけども、豊かな響きっていうのを厳しく教えてもらったのが、今となってはありがたいなと思います。人間、目立つときには目立つかもしれないけども、支える部分に入らなくちゃいけないときもあるんだと、吹奏楽部で学びました。

そんな感じで音楽が本当に好きになりまして、ちょっと東京の大学に行ったんですけども、うちの

おふくろが糖尿病で足を切断することになってしまい、いろんなことがあってぼくは東京の私立大学を中退してこっちへ帰ってきました。それで、あの千の風になっての秋山と同じ先生に習って、愛大に合格したんです。そして、愛大で音楽の教員目指して頑張ろうと思っている矢先に会ってしまったのが愛媛大学の落語研究会。通称愛大の落研です。皆様方、この春ご親戚、ご兄弟、ご子息、お嬢様、愛媛大学に入学される方あると思うんですけども、厳しく言うといってください。落研だけには入るな。人生をほろぼします。でも、人前で話して、笑いが来るというのにこんなに快感を覚えるというのは思っ
てなかったです。県内各地を回らせていただきました。特に南予の方とかよく行きました。地域のお祭りであったり、そういうイベントごとであったりするとき、ぼくら学生を呼んでくださった。学生の時は、ごはんを食べてお酒も飲ませてもらえてうれしいなぐらいですよ。でも、今わかりました。やっぱり地域の方々もそういう若いとか新鮮な風がほしいんですよね。方言が違う、気質も違う、空気も違う、そんないろいろなところに、あの時に行かしてもらったのが、ものすごくよかったです。今こういう仕事をするにあたって、地域活動をするにあたって、身になってるなあと思いますね。今になっても、たとえば宇和島の方でなんかええネタがないかなあというときに、その時のつながりの方などに電話をしたりするといいいヒントをもらったり、お店を紹介していただいたり、人をつなげていただいたりします。縁じゃなくて、縁なんですよ。袖振り合うも多生の縁という。これ勘違いしてぼくも覚えてました。多生の縁というのは、袖が振り合うくらいのそれだけ少しの多少の縁があるんだじゃなくて、多生は前世です。袖が振り合っただけでも、それは前世からの縁だよということです。ぼくの仕事を
するにあたって、これで支えられているなあ強く感じています。今日の会も、皆様との新たなご縁なんですよ。

地域のカタチもいろいろあります。30年前、ぼくが20歳過ぎの頃、当時ものすごく活気づいた地域が、中心、核となる人がいっしょにならなくなると、若い者でもわかるくらいの衰退の仕方をしていたりする。そんな地域を何個も見てきましたし、逆に新しく若い力が入ったところで盛り上がってそれが今でも続いているところもあります。その勢いがずっと続くかどうかはその地区の産業であったり、人物であったり、そういうことも大きいんだろうと強く感じています。でも、各地域で今日のテーマではないんですけども、おばちゃんとかおいちゃんの話聞いて、いっしょに「わー」と笑って、そのある部分部分をぼくはずっと自分のお話しをするときとかの肉づけにしているんだと思うんですよ。これくらいの小さなもらったネタをこれくらいに大きくするのがぼくの仕事のようなものです。ですから、何かヒント、キーワードのようなものをもらおうと、それを10倍100倍にできるいいなあと考えています。例えば、うちのばあちゃん、もうなくなりましたが、「渡る世間は鬼ばかり」というドラマがすごい好きだったんです。そのドラマを見ていたときに、そしたらテレビに話しかけるんですよ。中華料理幸楽のシーンで嫁と姑のバトルが始まったら、「もうこの泉ピン子はもうちょっとひかえて、もの言うたらええのに」みたいなことを言うんです。うるさいんで、ぼくは隣の部屋でラジオを聞いていたんです。すると、ある日、わーわー言っていたのが、突然黙り込んでしまった。何にも聞こえない。時計の針を見たらまだテレビドラマが終わる時間じゃない。あれ、おかしいな、どうしたんだろうと戸を開けてみますと、うちのばあちゃん、大丈夫でした。おせんべいくわえたまんま、まばたきもせず、テレビをじーっと見えています。「おばあちゃん、どしたん、大丈夫」と言ったら、テレビの方を指さすんです。テレビの画面に、「しばらくそのままでお待ちください」。こういう話をするんです。



こんなのもあるんですよ。ケーキ屋さんにね、うちのばあちゃんがもぎたてテレビ、あれを見た後で行きたがる。椿神社の近くにおいしいロールケーキ屋さんがあるのをご存じないですか。あそこ、ダメって言ったんですよ。ケーキがダメ、もぎたてがダメっていうんじゃなく、当日なんかいったら行列でおおごとになる。でも、「行かしてくれ」「連れて行ってくれ」とどうしても言うものですから連れて行くと、案の定、警備員さんが車誘導するくらい並んでるんです。20分くらい並んで、やっとというときに、ぼくとばあちゃんの二人前でロールケーキが売れ切れました。人生そんなもんです。しゃあないから、他のケーキでもええと言うので、女性の店員さんが「おばあちゃん何にしましょうか」と聞かれて、うちのばあちゃん横文字が苦手ですからこれとこれというようにケーキを5つ指さすんですが、「おばあちゃんすみません、ちょっとわからなかったんで、名前いってもらってもいいですか」と言われ、うちのおばあちゃん、「はい、とみながきみこです」と答えたんです。ケーキの名前言わんと自分の名前言うた。変わった店員さんでねえ、とみながきみこいうケーキ探しておられました。さっきも言いましたけど、噺家がこっち帰ってくるとなったら一緒に回ったりしてるんですけども、やっぱり地元のいろいろな笑い、笑顔に接すると、本当ぼくはこんな仕事をしてて幸せだなと思うんです。

ぼく、あるとき、天狗みたいになっているときがありまして、何か知らんけど、大街道を歩いていたんですけども、ぱっとブティックみたいな所見たら、向こうから何かげんそうな不機嫌そうなやつがにらんでるんですよ。何やねんと思ったら自分がショーウィンドウに写っていた。こんな顔してるんか。わー、いかんわ。こんな仕事してるのに、自分で自分の嫌なところ見ました。ぼくの好きな噺家さんで、もうお亡くなりになりましたけど、桂枝雀さんという方がいらっしやいまして、その方の本でぼく見たことがあるのが自分を陰気で根暗と自覚していらっしやったことです。こんな仕事をしてるんだから、それをなんとか払拭しなくちゃならないと思い、枝雀さんはお笑いの仮面をかぶってみた。にこやか仮面、にこにこにこにこしてる、最初はこれは疲れるなどと思ったんだけど、一か月したらその仮面が取れなくなった、と言われる。なるほど、おれもそうやなあとと思ったんですね。陰気なぼくは、どっちかという根暗で陰気なんですよ。本当はこう見えて。なのでぼくも、枝雀さんに習ってにこやか仮面をかぶらないかなあと考えています。まだできてないですけどね。

後やっぱりぼく、大切にしたいのは、学校の話に戻りますけれど、子どもの発想力というものです。今ネットで、よくテストの珍回答とか出てくるんですよ。調べたら結構笑いますけどね。ぼく、愛媛大学のときに小学生の塾の講師のアルバイトしてたんです。進学塾じゃなく、まちにあるちっちゃい塾です。どちらかという学校の勉強が苦手な子どもたちが来て、その日習った学校の勉強をもう一回おさらいさせてやるという4人ぐらいが1クラスで一人ずつ面倒見ました。あのときの4年生の発想がすごくおもしろかったです。社会で、「アメリカ大陸を発見した人は（ ）である」とプリントに書いたんです。コロンブスって書いてほしかったんですけども、その男の子、アメリカ大陸を発見した人は、「立派である」と答えました。花マルして返してやりました。あの子どないになってるかなと思いますね。豊かに人生送ってるんじゃないかと思います。その点、女の子はすごいですね。4年生のときから女の子ではなく、女性です。「A子さんは、学級の花壇を1時間で2分の1植え替えができますとします。B子さんは3分の1植え替えができますとします。A子さんとB子さんが1時間力を合わせてやると1時間でどれくらい植え替えをできるでしょうか」という分数の問題でございます。おわかりですね、6分の5です。その女の子、分数の答えを書くちっちゃい欄に何書いとるか、「やってみないとわからない」と書いたんです。なんでこんな答え書くんやって呼びつけてちょっと言ったら、100倍になって返ってきました。「先生、ほやけど私わからんと思います。A子さんとB子さん仲悪いんかどうか知りませんが、私、仲が悪い子と1時間も仕事よう一緒にしません」、「すみません」って謝りました。それから私女性

には口答えしないことにしました。一番無口ですよ、家の中では。外に来るとぺらぺらしゃべる仕事ですが、家では無口ですよ。「風呂、飯、掃除しとけ」そしたらぼくが「はい」。あと、一番笑ったんが、何年生か忘れました。「本能寺を焼いたのは誰ですか」「ぼくじゃありません」。

うちの息子のことですが、やっぱりとんびはとんびしか生みませんね。私みたいにこんなまぬけな、もうちょっとまじめな男になってほしいと思ってるんですけど、半ばあきらめております。国語の授業で二文字の熟語を書きなさいという問題で、ぐっすり眠ることは「熟睡」というのが正解でした。うちの息子の答案見たら「永眠」って書いているんです。おまえそれ、寝すぎやろって。自分の子やから腹立つんで、あれ、人の子やったら爆笑ですね。自分が先生やったら花マルしてると思うんです。子どもたちの発想は宝もの、地域の宝です。今は嫌ですね。虐待であるとか、変なやつに突然刺されたりとか。どうしたらいいかは非常に難しいなと思うんですけれども、そういう地域の宝物がすくすくと健やかに育てるような環境っていうのを我々がどうにかしてつくっていくべきなのかなあと思います。松山でも全然地域によって関わり方が違ってますね。あるところで、ぼくすごいなと思ったのが、獅子舞というツールを通じておじいちゃんから本当に小学生の男の子くらいまで一緒にこう何か一体感をもっているんです。毎年お正月に落語で呼んでもらっている畑寺なんですけれども、その連携が脈々とできている。この前まで高校生だった子が社会人になっても獅子舞をしている。そんな獅子舞という古典的で古いと思いがちな物が地域のツールになっているんです。逆にまったく薄いところもあります。うちの住んでいる辺りは、本当に祭りとかでも希薄な感じがします。当番なんかでもなすりあいみたいな。歴史にもよると思いますし、住宅の立ち方にもよると思いますが、松山以外の地域って、こういう感覚はどうなっているんだろうかなと思います。

さあ、今日はですねえ、うちのひめさぶろうというのが来ておりますので、ちょっと呼んでみたいと思います。「らくさぶろうの一番弟子ひめさぶろうでございます。父が松前町の出身で、おじいちゃんとおばあちゃんが松前町にいますので、愛媛大学へ進学して、私も残念ながら落語研究会に入り今に至るという結果でございます。ぼくは、大阪のNSCというお笑いの養成所に行きまして、そのまま漫才を続けるの



かなと思ったら、この愛媛が本当に大好きだと言うことに気がきました。そして、愛媛県で活動できたら幸せだなということで、大学の時に知り合いました師匠らくさぶろうに相談させていただいたところ、ありがたいことに弟子にさせていただきました。今年で3年目になります。」これもですね、彼が、こういうローカルのタレントといいますか、そういう仕事がしたいと相談受けたとき、後輩だからかわいんだけど、一人ローカルタレントをつくるんだったらあんまりぼくが教えてやろうと思っても限度があるし、逆にライバルを一人つくるようなもんだし。それも考えて、弟子という形だったら、ぼくもまた新たな展開ができるんじゃないかと思って、そういうことも考えてこんな形になってるんですよ。これも縁なんですけどね。でもまだまだなんですけど、一緒にいろんなところ回らせていただいています。

今日はせっかくですから、子どもたちに小学校中学校に行ったときに頭を柔らかくするというので、言葉遊びを一つやってるんですよ。それを一緒にやってみたいと思います。皆さん、子どもになった気持ちで考えてくださいね。「安全」のように「〇ん〇ん」という言葉はたくさんあります。これを子どもたちにどういふことをさせるかという、例えば「しんしん」という言葉を思いついたとします。そしたら、思いついたその前に一文この四文字を表す短い文章を考えなさいと言います。すると子どもたちの頭の中で違うところが働く。例題でいうと、「雪が降る様子です」、こっちが何ですかと聞いて「しんし

ん」と答えるわけです。それでは、どなたかどうぞ。「うちの今日の嫁さんです」。何ですか。「かんかんでした」。何やったんですか。次、お願いします。「今日はここに来る前に石手寺によってきました」。何ですか。「ばんばんしてきました」。うまいですねえ。「今日もいいきっかけをもらって、地域が」。何ですか。「ぜんしん」。前進とはすばらしい。「落語をされない二人の姿を見て」。何ですか。「しんせん」。ありがとうございます。こういう感じなんです。皆さんもぜひ、子どもの頃にかえったつもりで、普段使わないところを使ってくださいね。

さあ、あと 15 分くらいになっております。一方的な講演というよりは、残念ながら後半に参加できないものですから、皆さんと一緒に勉強といえますか、吸収して帰りたいので、質問形式で何かいただいたことをお答えしていきたいなと思っています。何かございますか。「以前北条でらくさんの落語を聞かせていただく機会があって、そのとき仕事をしていてつらいつらいつらという感覚がわからない、自分が好きでやっている仕事ですからつらいというのは不思議な感覚がするとおっしゃっていました。最近まで地域づくり、まちづくりの仕事に関わり、いろんな地区の方のやる姿を目の当たりにして大変だなと思うんですけど、大変だからこそ続けられることとか、何か気持ちがあるから続けられるみたいところを教えてください」。ありがとうございます。ストレートにそのままなんですけれども、22 年くらいになりますけれども、この仕事でどんな仕事をいただいても一回もつらいとかはないんです。生みの苦しみみたいなのはありますよ。好きなことをやらせてもらっているんで、たとえば視聴率が悪かったり、反応に対して落ち込んだりすることはあります。絶対ネットの評判なんかはへこむので見ません。でも、評価に対するのはあります。ぼくらの世界、一番そこがはつきり出てきますから。いただいている仕事に関しては、本当に好きで取り組んでいます。よく演歌歌手の人が苦節 15 年売れない中苦労してきましたと言っていますが、好きな歌ずっと歌ってきとるやないかい、やめてないやないかいと思います。地域づくり、PTA も一緒に、PTA の活動をしているとよく遅かったり、逆に晩飲んでいて朝早く出て行ったり、あと運動会で汗かきながらやったりしますけれども、わが子が学校にいるその中の一つでぼくは動いているので、全然逆にうれしいです。学校にいる、いられる感覚、安直かもしれませんが、ぼくはそんなところに喜びを感じます。

(学生に対して) 今、学校、学部はどちらですか。「社会共創学部」。あの新しいところですよ。それは地域、お仕事に結び付けたい。「そうです。地域づくりに興味があって、知識とか経験を得るため」。じゃあ、本当に今充実しているんでしょうね。単位だけ取って仕事どうしようかなあというタイプの者も多いのも事実ですけども、あなたのような目でしっかり語れるというのはうれしいですね。ぼくもそういう地域のことについての勉強がしたかったのですごくうらやましいです。もうちょっと生まれるのが遅かったら、その学部に入りたいと思っていました。

他に何か。「いろいろ学校とか今まで演じられる中で、わが町っていいなというような気持ちになるおすすめの話やネタ、そういう感想が子どもたちから出やすかった演目とかあれば教えていただければと思います」。子どもたちからそういう感想が出るような演目ですねえ。でも、いろんな話があるんですけども、この対象でって限られてくるんですよ。丁稚さんが主さんから平林さんところへ手紙を持っていきなさいというので持って行かされるときに、名前を忘れてしまって通りすがりの人に聞くんですけど、たいらばやしさんって言われたり、ひらりんさんって言われたり、いちばちじゅうのもくもくさんと言われたり、そういうのはあります。あと、ドラマにもなりましたが、「ちりとてちん」であったり、桃太郎とか寿限無とかであったり限られてくるんです。特に小学生の場合、この平林なんかはけっこうその地名をそこでやってあげたりすると、ちょっと喜んでもらえる。舞台監督は柱ができていますからちょっとアレンジをしてやったり、校長先生の名前をちょっと入れてやったりするとぐっと

子どもたちは親しい感じになります。あと、例えば南予に行ったら南予の地域の食べ物を少し入れてやるというようなことは感じています。ぼくらの中には、さっきみたいな全般でこう使えるような話、ネタがあるんですよ。ネタっていうか古典のネタじゃなくってちょっとした笑いのネタです。

他にございませんでしょうか。「地域の小学校に行ったときに、言える範囲で構わないのですが、失敗談とか、ここをこうとってほしいなとかがあったら教えてください」。そういう要望というか、こうしとってほしいなということはなかったんですが、7・8年前にいじめと命の問題を考える会に参加したとき、1時間の中で「いじめはいけませんよ」「命は大切にしてくださいよ」とそういうことばかり言っていると、多分聞いている方も陰うつになるんですね。だから必ずぼくは、言葉にはプラスの世界とマイナスの世界があって、ネットもいい部分と悪い部分があるから気を付けないかんよという話の中で、最後は小話も入れたりして笑って終われるような展開にしているんです。ある中学校に行って、まじめな話のときはしっかり聞いてくれる。そのお笑いのところになると、ドッカンドッカン反応がすごいときは、あー、今日はよかったなと思います。3日後にその学校の隣接している中学校に行って、ほぼ同じ内容でしゃべろうとしたら、スタートの段階からよどんでいるんです。聞くと、当時はその学校非常に荒れていたそうで、人の話を聞いて笑うこと自体がださいという感じでした。昔、金八先生で一つの腐ったみかんの話ではないですけど、こういう空間でそうなんだなとひしひしと感じます。でも、その学校も去年行ったときには全然普通に反応がありました。

それでは、もう一人何かありますか。「ずっと愛媛で生活してきて、就職も愛媛でさせていただいて、地元でずっといるとなかなか実感としてわからない部分があるんですけども、愛媛のよさとか地元のよさとかあれば教えてください」。これについてはひめさぶろうに聞いてみたいと思います。「大阪や東京に比べて、愛媛は人は少ないじゃないですか、でもその分関係が多いような感じがするんです。やっぱり、都会でしたら、すれ違うだけで、肩がぶつかっても何も謝ってもらえないみたいな。町自体にいい人はいるんですけど、よどんでいる感じなんですね。空気感がものすごく嫌いで、地元は兵庫県の田舎の方だったんですけど、高校は神戸の高校に進学してどんどん都会に近づいていくほど嫌なところが見えてきました。愛媛ではそういった部分がなくて、なんていい町なんだろう、人の温かさというのを感じて、ここで生きていこう、この町で死ねたらええなというのを感じました。やっぱり一番は人だと思います」。ぼくの場合は地元でずっといますけれども、よく言われるのがやっぱり松山は適当に都会で、動きやすくて、暮らしやすいですね。この前ちょっと確信したのが、愛媛マラソンです。ぼく、何百万円積まれても走れないんですけども、家でテレビを見てたんです。すごい走りに涙し、いろんなことを考えて、走った人とかの感想も含め、絶対ぼくみたいに参加していない外側の者から見ると参道での応援とか非常にすごいと思いました。根底にあるお接待の、人に施してあげるのを苦しめない、そこのお遍路文化のいいところがこのマラソンに象徴されているんじゃないかなと思います。物をあげるとか飲み物をどうこうじゃなくて、うちの近くじゃけん、手でも振ってあげよか、という気持ちが表れている。例えばぼくは本当は走れないんですけど、走ったとして、あれだけ応援されると、人間て気持ちががんばれるというふうになっていくんじゃないかな。うちのおかんなんか人も人に本当におせっかいじゃないですけどもようやっていました。あれって無償の愛といいですか、そういうところがあるんですよ。

本当、皆さんと一緒にこの後の会にも参加したかったんですけども、別の仕事もございまして、お耳汚しではございましたが、最後までご清聴いただきまして、本当にありがとうございました。

実践発表



グループ別協議 1

ファシリテーター 前田 眞

記録者 遠藤 敏朗

文化資源を活かした地域づくり・観光まちづくり～三津浜・内子町臼杵の事例～

発表者 愛媛大学法文学部・社会共創学部 井口研究室

竹本 萌香 久保 葵

地域の文化を資源として活用することで地域住民が自らの地域の価値を見つめ直し、新たな価値を創造することができる。また、伝統文化の担い手を見つけるだけでなく、記録することにより確実な継承を行うことができる。

松山市三津浜地区では、地域住民の地元に対する再評価を通して、三津浜の魅力を再発信し、三津浜のファンづくりを行うことを目的に、「三津浜検定」「三津浜まち歩きガイドブック」のプロジェクトを立ち上げた。これによって、地域住民は日常を再評価、地元の魅力を発見することができた。また、観光客は、三津浜地区における暮らしと文化を知るきっかけとなった。

内子町臼杵地区は、高齢化率が60%以上で、地域の伝統芸能「お練り」が消失する危機があった。そこで、この「お練り」を継承するとともに、臼杵全体の伝統文化を存続させるきっかけづくりとして臼杵パネルの作成・展示を行った。これらの活動から、地域のリズムに沿った日々の暮らしの積み重ねとそこから生まれる文化が地域づくりのシーズとなると考える。

【協議内容】

- Q 三津浜、内子を選んだのはなぜか。
- A 二つの地域にはそれぞれ思いがあった。大学の方に声が掛かり、そこを選択した。
- Q 二人とも同じ場所に行っているのか。
- A それぞれがメインを決めて行っている。
- Q そこに住みたいと思うか。
- A 住みたいとまではいかないが、ファンとして愛着はある。
- A 自分の地域と比べることができるという点



でよかった。

Q 地域の中で自分の役割はどんなことか。

A 少しずつ地域の方と関わるようになった。

A 大切に思っている文化である。

Q ボランティアとして関わったのか。

A 研究室の中で関わった。

Q 大学に入る前に地域とどんな関わりがあったか。

A 母親が公民館活動に参加していた。小学校時代は地域の行事に参加していた。大学生になり、スタッフとして主体的に関わるようになった。

A 出身の広島では地域とは希薄になっていたが、愛媛で関わるようになった。

Q 三津浜検定について詳しく教えてほしい。

A 行政だけでなく、地域住民、小学生など多様な人と関わりながらそのときでしか分からないことを学ぶことができる。

Q 伝統継承についてどう思うか。

A 臼杵地区では高齢化が進んでいる。多様な地域住民がいることを実感している。コミュニケーション、信頼関係の作り方が大切である。

A お練りは技術ではなく、伝統文化であるということが分かった。地域での時間の重要さが分かる。

○ 5年間、大学生との関わりを続けてきたが、子や孫のような感覚になってきた。今後も、大学生に来てもらいたい。大学生にきっかけづくりをしてもらったので、地域でも何かチャレンジするようになればよい。

○ 今住んでいる高市は、高齢化、過疎化ではなく過疎である。だから、新たなチャレンジが必要である。そこに暮らさなくてもできることがある。高市小の場合、山村留学の制度が地域を存続する機会になっている。住むことにより、地域外からの交流があることが大事である。

○ 高齢していても生き生きしている町に住んでみたい。

○ 今日の発表を聞いて、新しい形にすることが大事であることを学んだ。

○ 学生として今後地域に関わっていくうえで、地域の思いや願いを知ることが大事になる。

○ 地域との関わりはこれまで遠い存在であった。今は高校生だが、今後大学に進学したときにできることを考えたい。

○ 三津浜検定の作成については、本当に大学生に感謝である。

F 地域のイメージは「人がつながっている」「生活、文化の結晶」である。

今日の発表で大事なことは、地域の課題に対して大学生など外部からの協力の型ができたということである。つまり、大学生が関わることによって「見える化した」ということである。地域にとってはエンパワーメント、学生にとっては存在意識。



グループ別協議2

ファシリテーター 柴崎 あい
記 録 者 谷川 玲子

六つの志～夢を追いかける私たち～

発表者 松山大学学生地域創造研究所M u s e

中村 麻祐

M u s e とは「Matsuyama University Students Empowerment」の略で学生が主体権限をもつという意味を表している。2008年8月にNPO法人化され、現在101名の学生が在籍している。そして、「勇気」「創造」「誠実」「情熱」「知性」「品性」という六つの志をもち、様々な事業を展開している。

社会貢献活動としては、過去9年にわたって愛媛県内札所26か寺の手書きのイラストと英訳版の遍路マップを作成した「遍路マップ制作事業」、松山市久谷地区のほたる祭りに協力しおでん出店と子ども向けブースを担当している「ほたる祭り支援事業」がある。他にも、「キャップで愛を届けよう事業」「FM愛媛ラジオ制作事業」「マイロード清掃事業」などを行っている。

社会連携事業としては、えひめ愛フード推進機構との連携事業で愛媛県産農作物を使ったスイーツのコンテストのレポートや道後ロールの取材を行った「愛媛スイーツプロジェクト事業」、松山市教育委員会主催で小中学生の農業体験や地域文化を学ぶ事業をサポートしている「ぼんぼこ村支援事業」がある。他にも、「村の駅支援事業」「総務省四国総合通信局委託事業」などの活動を行っている。

メンバーは、地域の様々な方や社会と関わりながら、仲間と連携し合い自主性を育みながら、やりがいをもって活動している。

【協議内容】

柱1 「かわりをチカラに つながりをカタチに」

若い力と地域…「かかわる」ことで生まれたものは？

Q NPOになる前に、集めたキャップを持っていくなどお世話になった。松山市教育委員会主催のぼんぼこ村支援事業に興味がある。どのくらいの頻度で行われたものなのか。市内の学校への呼びかけは行われたのか。

A 久谷坂本地区で月1度を基本に取り組んだ。8月に1泊2日のお泊り合宿も行ったので年間10回から12回実施した。市内の学校には市教委の方から呼びかけてもらった。

Q ぼんぼこ村支援事業には坂本小学校在職のとき3年間参加した。久谷の奥の坂本屋という旅館を借りることができた。高齢者クラブが、地元の指導員として関わっていた。疲れてくると思うが存続していてうれしい。現在の高齢者クラブとの関わりはどのようになっているのか。平成22年からの取組だった。



A 野菜作りにおいても、子どもたちだけで全てはできない。月に1度集まって植え付けや収穫を体験するが、その間の野菜のお世話や草抜きなど子どもたちだけでできない部分を助けてくれている。普段の生活になっている。

そば打ちや餅つきの指導もお願いしている。学生はサポートの係になっている。

F 高齢者と若い人との良いコラボになっている。

○ 坂本公民館の事業だった。熱心に取り組んでいた。

Q 活動するとき大学内での横の連携はあるのか。中村さんの夢は何か。

A 基本的にはMuseのみで活動している。ぽんぽこ村支援事業には愛大の学生の方が来たことはある。

将来、松山大学の職員になりたい。狭き門だが、職員になってMuseから学んだ経験から、学生に社会連携活動を続けてほしいと考えた。

他の大学との連携の話は今はないが、今後考えていきたい。

F 大学職員として学生をサポートしたいという考えはすばらしい。ボランティアセンター的なものがあると活動しやすくなる。

Q 活動目的、Museとしての夢は何か。

A 大人数だからできることがある。地域や学校と関わりをもち続けることができるとよいと思っている。学生の視点での関わり方を大切にしたい。

○ まちづくり協議会の活動の中で主体で動いている人の高齢化が進んでいる。中に若い人が入ってほしい。八つの地区があり、それぞれに神輿がある。横のつながりがない。横のつながりを作って若い人たちに参加してほしいと思っている。現在、取り組み中で、地区に愛大農学部があり、その学生も参加してもらっている。

Q まちづくり協議会の方から学生に呼びかけることはあるのか。

○ できているところは地域住民に呼びかけている。若い人に出てきてもらわなくてはいけない。

Q 活動していて学生と地域の方との考え方の違いは出てこないか。

A Museの活動は何種類もある。その中で好みが分かれる。イベント的なものには学生は集まりやすい。学生だと楽しいことに集中する。地元の方からは、地元の良さを取り入れてほしい等の要望はでる。

Q いろいろな事業があってよい。やった分だけかえってくるものがある。就活や職場でも経験すると思うが、自分の考えのみで活動することができないこともある。団体としての責任もあると思う。後輩への関わり方や継続のコツがあれば教えてほしい。

A 卒業生も活動に遊びに来てくれる。人のつながりや縁が大事。3回生がリーダー、1回生がサブリーダーというたてのつながりや役割分担も大切。来年度は意欲のある2回生がリーダーになる。

F 若い方にも次世代育成の課題があるようだ。

学生が集まりやすいイベントと、企画や会議のように集まりにくい内容がある。村の駅支援事業のイベントや、キャップで愛を届けようのように時間があるときに手伝うというような内容には人が集まるが、総務省四国総合通信局委託事業のアプリの開発には人が集まらなかった。人集めの課題も見える。

A 活動していてよいところは達成感を感じることができること。

柱2 若い人たちが関わることでどう変わるのか。

地域の人にどのように思われているのか。

Q 若い人が地域におこした風は？人が集まらないということに対して。

- 大人、子どもに関わらず、成果や手ごたえのようなやりがいが見えたとき達成感を感じるのではないかな。達成感を感じることで人が集まる。
- 記者クラブに情報を提供するなど、メディアリリースを行い、一般の人たちの目につくようにするのもよいのではないかな。このようなメディアリリースのようなつながりを大人が作っていくことも大事ではないかな。
- 学校への若い方が参加することは、自分たちよりも少し上のお兄（姉）さんだから伝わる「近さ」がある。

柱3 喜びを共有すること

- 安全マップを作成してもらった。行政の立場としては、NPO は信用もありすぐにお願ひできるよさがある。外から見た目から新鮮な風が吹く。
 - 学生の主体性を大切にしつつ、行政は長く深く関わりたいと思っている。この二つがうまく関わる落としどころを探している。
- F ヤングボランティアでも、当日だけというボランティアだと良い様に使われていると思っないかな不安になる。若者が主体的に動くことで地域に若い力の風が吹く。
- イベント系のボランティアのみになっている。少人数でも必ず動くので声をかけてほしい。学生の横のつながりも大切にしたい。
 - 深く長くかかわることができる機会を作る努力をしていくことが大切である。
 - 地域の方から依頼していただき参加できる機会をつくっていく。不安や疑問があると思う。若い方が参加することで、動くことができる即戦力となるし、新鮮さもでる。
 - 学生と地域が別々に考えるのではなく一緒に考え、継続した長く深く関わるすることができる機会をつくる。
学生がチャレンジできる機会をつくる必要がある。
 - 課題をみつけ解決していくプロセスを共有できる機会をつくることが望まれる。

グループ別協議3

ファシリテーター 松本 宏

記録者 大森 茂樹

社会教育と出会って～双海町で生まれ育った私～

発表者 愛媛大学教育学部 双海町JL会

宇津 博美

中学2年生の頃から伊予市双海町でボランティア活動に取り組んでいる。

双海町こども教室「ふるさと体験塾」では、双海地域特有の魅力あふれる自然・文化・産業等にふれ、様々な体験活動を行っている。これは、ふるさとを愛する心をもった心身ともに健全な子どもを育てることを目的とした公民館事業である。一年間を通じて「ふれあい体験」「ふるさと体験」「ふたみ再発見」の3つを目標に掲げている。

通学合宿「夕焼け村」は、双海町内の3つの小学校4～6年生の参加希望児童が集まり、町内の宿泊施設「潮風ふれあいの館」に一週間宿泊し、炊事・洗濯・掃除・買い物などを集団生活の中で体験する活動である。子どもたちにとっては親離れ、保護者の方にとっては子離れの場となってい

る。

これらの活動を継続しながら、今では双海町に関わらず、様々なボランティア活動に参加している。

【協議内容】

Q 発表を聞いて双海町が大好きなことがよく分かった。9年間ボランティア活動を続けた中で苦労したことややらされていると感じることはなかったか。

A やらされていると感じたことはない。ただ、高校3年のときに、活動をやめて勉強をしようと思ったことはある。だが、そのときに後輩のメンバーや公民館の方から「博美ちゃん、おかえり」「また、一緒にやろうや」といろいろ声を掛けてもらい、やはり続けようと思った。

Q いろいろな地域で人材の確保・育成は大きな課題である。ジュニアリーダーの組織、特に研修のシステムがすばらしい。研修内容をもう少し詳しく教えてほしい。

A 毎年3月に行い、今年で6回目である。人間牧場で講話を聞いたり、みんなでカレーを作ったり、人工衛星を見たり、蚊帳で寝たりもした。大洲青少年交流の家で、レクリエーションの講義を受けたり、「双海子ども教室10のおきて」を話し合ったり、スタードーム作りを学んだりした。

F 宇津さんを見て、後輩が同じようにやりたいというように育ってきている。双海町は子ども教室だけでなく、成人を対象とした「まちづくり学校」や史談会等も活発で子どもから大人まで学習する場がたくさんある。

○ 自分が関わっているときにジュニアリーダーの研修を始めたが、基本的には中学生の自主性を大事にしなが研修プログラムを作った。

F 地域教育実践交流集会では「かかわりをチカラに つながりカタチに」をテーマにこれまで取り組んできた。学生は現在地域の活動に関わっていること、大人は関わりをつくるためにはどんなことを大事にしなければならないかを、付箋紙に書いてホワイトボードに貼ってほしい。

○ 大学のサークルで子ども会活動に取り組んでおり、遊びや人形劇、紙芝居などを行っている。

○ 同じ子ども会の子どものもと継続して関わることで、成長を感じたり子どもの考えが分かったりして充実している。

○ 内子の臼杵地区で地域の人と関わりながら祭りの踊りを覚えるなどの活動を行ってきたが、人の役に立つということを実感できた。卒業したら直接は関われないけれど、祭りのときは参加するなど今後も関わりを続けたい。

F 以前、校区を活性化するために、愛媛大学の学生が関わり、いろいろアイデアを出してくれた。

A 私が中学生の時にその方を見て、自分もそうなりたいとあこがれを感じた。



- F 大人が大事だと感じることは、「若者と話をする機会」「リーダーや後継者の育成」ということが多いようである。
- 宇津の母親である。以前、双海子ども教室の世話をしている方から、子どもと大人をつなぐ真ん中の位置にある中・高生のリーダーがほしいという話があり、娘にやってもらいたいという話があった。本人に確認すると、やってもいいということだったので、そこがきっかけである。
 - 双海中学校で教員をしている。中学生も勉強や部活が忙しいが、個人的には子どもたちがボランティアに行きたいと言えば、なるべく参加させたいと思っている。今では、参加する中学生からのつながりが広がり、人数もかなり増えた。子どもたちが参加しやすい環境を整えることが学校としての課題である。
 - 私たち学生も、いろいろな地域活動に参加するにあたり、自分たちも研修は必要と考え勉強している。
- A 今は、双海子ども教室以外にも、伊予小放課後子ども教室にボランティアとして参加したり、夏休みに行われている無人島体験事業にも参加したりした経験がある。それらが全て自分の力になっている。
- 宇津さんを子どもの頃から見ているが、本当に成長を感じる。今では、考えて行動できるようになってきた。
- F いろいろな人と関わることによって、自分の力となる。若い人が地域に関わってもらい、大人もそれを見て学び、協働がこれからは大事になってくると思う。

全体協議

(グループ1から協議内容を順に発表)

- 学生の発表を聞いて、自分もがんばらねばと思った。
 - 学生が真剣に取り組んでいることがよく分かった。
- Q 宇津さんが感じる「双海のよさ」とは何か。
- A いろいろあるが、やはり一番のよさは「人」である。先輩や後輩、そして地域の人みんなが本当に温かく関わってくれる。
- Q 自分たちがやっている活動にも、大学生にボランティアとして関わってもらいたい。Museの卒業生たちは、今どんな活動をしているか。
- A 自分の地域でボランティア活動に参加したり、自分でボランティア団体を立ち上げた方もいたりする。
- 南予のブロック集会に参加したが、中予では大学生の地域活動に取り組む姿勢や協力が本当にすばらしいと感じた。



(若松)

- 「古い里」と書いて「古里（ふるさと）」と読んでいた。今日の発表等を聞いて、これからは「新しい里」と書いて「新里（ふるさと）」と呼ぶようになる。地域に住んでいる子どもたちを仲立ちにしたら、古い里から新しい里に変わっていく。地域に住む「子どもを育てる」ということが、今日の集会のキーワードになると考える。



参加者数

高校生3名 大学生35名 一般61名 計99名

参加者の感想

【高校生・大学生の感想】

- 今後の地域づくりについて考えることができた。
- 様々な団体の方と交流ができ、とてもよい勉強になった。
- 今日ははらくさぶろうさんの落語家として、また父親として地域に関わっている中で感じ得たことや、3グループの大学生による熱意ある発表を聞かせていただき、とてもよかった。
- 大学生が社会でとても求められているのがよく分かった。年上の方たちの中に混ざって話を聞いて、レベルの高さに刺激を受けた。
- 大学生の方や大人の方は、地域のために本当にいろいろなことを思い、考えているのだなと思った。これからの地域を考えるととてもいい機会になりよかった。
- 様々な年代の方が集まる機会だったので、もっと直接意見交換できたらいいなと思った。自分ももっといろいろな活動に参加して、たくさんの人と出会いたいと思うことができた。
- グループ協議によってより深まった。全ての実践発表についてもっと協議したかった。
- 熱い思いをたくさん聞いた。「○○が原因で、○○がうまくいかなかった」など、理論的理屈的な話も聞きたかった。
- 他の学生の方々がどんなことをしているのかを知ることができて、勉強になった。いろいろな活動をしている人たちと話す機会は大事だなと思った。
- 同世代の活動報告を聞くことで、地域との関わり方を知ることができた。若者にできること、若者だからこそできることを考え、実行していきたいと思った。
- 地域との様々な関わり方を知ることができ、自分にもできることは何かを考える機会になった。大人の方から大学生（若者）に求めていることという意見もいただいたので、それも参考にしながら今後の活動につなげていきたいと思った。
- 地域の人々と関わっていくことの大切さを知った。私たちはまだ若いからそんなに関わらなくてもよいと思っていたが、若い私たちだからこそ関わる必要があるのだと思った。
- 初めてこのような地域教育に関する集会に参加した。私はまだ大学1年生であるが、同年代の

人がこれほどまでに地域のために貢献していることに驚いた。残りの大学生活またはその後において自身にできることを見つけ、実現できればと感じる。

- これまで学生の立場で、様々な社会教育に携わっておられる方々にお会いしてきた。今回は同じ学生の立場で、こんなにも熱心に社会教育や地域づくりに携わっている人たちがいることを知れて本当によかった。この会を大切にしていきたい。
- 私と同じ大学生がいろいろな活動を通して地域とつながっていたり、悩んでいたりと、新しい発見をしたりしていることに気付くことができた。かっこいいなと思ったし、私もやってみたいなと思った。
- 一口に「地域との連携」といっても、その手法には様々なものがあると感じた。印象的だったのが、地域に入らなくても応援的な役割として連携を図るという考えで、斬新だった。
- 「国が困らなければ国は動かない」とは最近聞いた言葉で社会問題を解決するために欠かせない視点だと思うが、たとえ当事者が困ってなくても誰かのために何かするというのがボランティアの形なのかなと思った。大学生の活動であるため、まだまだ荒い部分もあるが、行動力をもって地域に入り、外からの視点で新しい風を吹き込むというのは有意義なものであると思う。
- どの発表もとても興味深く、おもしろい事例だった。研究、NPO、個人といろいろな立場で違った対象（地域）に入り模索しながら活動している様子がすごく伝わってきた。地域づくりに関わるということは地域に元気を与えるだけでなく、私たち学生にとってかけがえのない経験になっているということに再度気付かされた。
- 今日発表をして、実際に自分たちがしてきたことを振り返るよいきっかけとなった。
- 今回発表者として参加させていただいた。臼杵の事例についてだったが、グループ協議で様々なご意見をいただき、新たな知見が生まれた。とても貴重な場となった。
- 今日は一つ目の発表に関わらせていただいた。参加された方からの質問や意見を聞き、自分がしていたことがよりはっきりとした形で見えてきたこと、またお二人の発表を聞いて「そういうやり方もあるのか」「だとしたら自分たちのプロジェクトにはこういう課題も出てくるな」など新たな発見もあったこと、これらが今日の収穫である。
- 三津浜・臼杵は自身が実際に経験したことを報告するという形だったので、発表を聞いた人がどのような点に疑問を抱き、この発表からどのような感想を抱くのかとても勉強になった。松大のNPO活動では規模が大きく、多彩な活動をしていて実績が大きいことがよいと感じた。宇津さんは9年間もボランティア活動を自主的にしていて、全ての関わりをもつ人々に感謝の気持ちをもって活動している姿が個人的に素敵だなと考えた。
- 私は活動に参加した側として見てきたが、自分の活動を振り返るよい機会になった。他の方のお話でも学ぶことがあった。様々な方法で地域に参加できるということや、学生が入っていける環境があることの重要性を感じた。そして、どのことにも共通して、継続することの大切さと難しさを感じた。地域の方が来てくださって、活動に関しての思いや意見をくださったのがすごくうれしかった。
- 自分たちのような大学生が同じような活動をされていて、他団体と共有することはほとんどないので、とてもよい刺激になった。今後の活動に向け、十分よい参考になった。
- 私も数少ない回数であるが、ボランティア活動等の課題活動に参加させていただいたことがある。今回の集会に参加し、同世代・異世代の考え方や直接的な意見をお聞きし、学びある時間を過ごさせていただいたことに感謝する。人との出会いは縁あるものだと考えさせられ、一瞬一瞬

を大事にしていきたいと思うようになった。学生である私を含め、若い力が今後の地域・地方に
対してできることは全力で取り組みたいと考えた。

- 同じ学生ががんばっている姿を見て感動した。自分はこちらまで活動をしてこなかったのが勇気
をもらった。今日見た内容以外でも様々な活動をしている学生を見てみたい。グループ協議がも
う少しあるとよかった。
- 地域外の学生でも、自ら積極的に地域に参入していくことがこれからの地域の未来づくりに大
きく関わっているのだなと思った。また、地域住民が過疎化をマイナスと考えるのではなく、プ
ラスに考えていくことで地域が活性化することにつながるのではないかと思う。今日の発表を聞
き、自分だけでなく多くの学生が地域のために活動を行っているを知り、よい刺激になった。
- 通学合宿や人間牧場などでの子どもたちの体験は、とても重要であると思った。地域に恩返し
をしたいと思えるような環境で子どもを育てることが、やがて地域の繁栄につながると思う。ほ
とんど自分と同世代で、ここまでの活動をされているのはどの方もすばらしいと思った。

【一般の方の感想】

- 地域づくりに実践のある方々で元気が出た。若い人とのネットワークもでき、大変いい時間を
いただいた。
- 若者が地域の価値に気付いてくれることはうれしい。
- 若者の発表の後の質疑応答や意見交換で、お互いへのニーズを伝え合ったり、評価（感謝）し
合う言葉が交わされたり、温かな希望に満ちた会だった。
- 地域づくりに関する外部（特に学生）の関わり方について、受け入れる地域の側がスタンスを
決めきれていないのではないかと思った。有限的にしか関われない外部のまちづくりのパワーを
どう取り入れていくのかを考えていく必要があると思う。
- らくさぶろうの話で「吹奏楽部における体験を通して、目立つときもあれば支えるときもある
ことを学んだ」と聞いて、それぞれの立場で支え合って1つのこと（事業など）が成り立つと思
った。大学生の自主性にあふれた地域貢献につながる活動は大変参考になった。若い力と地域に
ついては、いろいろな立場の方の意見を聞くことで、若い力がどのように関わることで地域がよ
くなっていくか考えることができた。また、ファシリテーターの勉強にもなった。
- 大学生がこんなにも地域に関わっていることを知らなかった。よい勉強になった。中学生もも
う少し地域と関わらせたいと思った。
- 社会共創学部、大学生の参加に力強さを感じた。地元愛に燃えてがんばるらくさぶろうさんに
感激！愛媛の宝に!!子どもたちのため、後輩のため、地域のためにJLとしてがんばる大学生に
感激！さぞ立派な先生になれる!!
- 大学生の活動が予想したレベルをはるかに超えていて驚いた。高校も大きく変わりつつあり、
社会教育に新しい波が起きつつあるように思った。らくさぶろうの話はなくてもよかった。
- 元気な大学生にエネルギーをもらった。このような若者がもっと増えるといいし、増やしたい
と思った。
- 地域教育、社会教育に関する知見を深めるよい機会になった。様々な貴重な意見を聞くことが
できた。いろいろな世代の方との縁を大切に生きていくこと、地域に恩返ししていく必要がある
ことを再認識した。参加して本当によかった。
- 「今どきの若者は」なんて言われる言葉を死語にしたい。学生は学生なりに真剣に考え、真剣

に取り組んでいる姿を見せていただいた。「かかわりをチカラに つながりをカタチに」私も、今後地域ともっと密にがんばっていきたいと思う。勉強させていただいた。

- 学生は新鮮な視点ですばらしい発表だった。今までにない研修を体験させていただいた。学生の主体性が感じられてすばしかった。ひめさぶろうさんの登壇が新鮮でとてもうれしかった。
- とてもすばらしい実践なので、八坂校区のまち協の方々にも伝えていきたい。学生さんへのアイデア、参考となる内容がいっぱいだった。社会・地域との連携手法について、学校での実践に生かしていきたい。課題も見えてきたが、明るい未来が開けていけそうな実感を得た。特に発表者の方々の満面の笑顔を拝見して感動した。途中参加で、らくさぶろうさんの講演を拝聴できず残念だった。
- 大学生はすばらしい。未来に向けてがんばっている姿に感銘を受けた。地域教育のこれからが楽しみである。私自身も、これから自分なりに地域づくりに貢献していきたい。
- 次世代を担う若者の様々な活動の発表を聞く貴重な機会に参加できたことに感謝したい。ボランティア活動の新たな活動の場を求めている学生の思いを感じることができたので、今の職場、地元でどう関わってもらえるのか考えていきたい。少子高齢化、過疎化が急激に進む本県であるが、地域に新しい風を吹かせる役割を私自身も務めていきたいと改めて感じた。
- 自分が大学生の頃は、ボランティア活動なんて全くしていないし、そのような風はなかったので、今の大学生は本当にすばらしいと感じている。私の息子も今、青年海外協力隊で国外に出ているが、帰国したらこのような活動をしたいという気持ちが高まっているようである。超高齢化社会に突入しようとしている今、今回の発表を聞いて若い人の力にすごく期待できるし、楽しみである。
- 若い人が多かったので、活発でハツラツとした気持ちにさせる集会であった。学生のときに活動している人たちが、継続して地域づくりや社会教育に関わってほしい。そのための大人の支える仕組みを整えなければならない。
- 若者の活躍を求める地域と、若者のマッチングが大事と感じた。ひいては、もともと地域にいる若者と地域との関係も目を向けないといけないと感じた。きっと彼らと共に地域を考えることが可能なはずだと感じた。
- 若い力のすばらしさを感じた。発表者の態度から主体的な気持ちと充実した活動ぶりが伝わってきた。若い力と地域が連携して、すばらしい社会が形成されるよう、自分たちもできることから取り組んでいきたいという思いを強くした。
- 実践発表を聞かせていただき、大学生のパワーを感じることができた。また、双海町の実践発表、グループ協議に参加させていただき、とても町が好きな人なんだと強く感じた。地域に愛着がある人が増えると、地域の活性化になる。実践発表は女性の方が多く、個人的には男性もがんばってほしいと思った。
- 実践発表は、どれも興味深い内容だった。大学生が地域の中に入ってどんどん活動していることを知り、うれしくなった。私が所属する課は「ふるさと愛媛学」事業を行っているが、私たちの活動と共通するものがたくさんあった。また私たちも、県内の各地域の人々から聞き取り調査をしているので、その成果を大学生にも伝えたいと思った。
- 大学生のパワーを感じた。今はいろいろな地域に関わりをもってつながりを広げて経験を積んでもらい、最終的には自分が住むまちづくりに取り組んでもらいたい。若い人との関わりがとても刺激となった。社会教育を学んだり経験したりした若い力が、学校教育へ入ってそれをうまく

生かしてほしいと思う。

- 熱心な活動が行われていることを改めて知り、刺激になった。
- 実践発表はどの発表もよかった。発表は、宇津さんに代表されるように自分の言葉に変えてできるとよいと思う。グループ別協議は様々な意見を出していただき、よかった。
- 学校現場として社会教育に関わることがほとんどなのだが、今回の実践発表を聞き、今後多くの地域で必要であり、多くの活動が行われていくことがあればよいと思った。とある方の言葉に「まちづくりは人づくり」とあったが、まさにその通りだと感じた。
- 若者の意欲、努力、可能性を何倍にも生かせるような地域の一員であり、支援者、実践者でありたいという気持ちが高まった。若者を巻き込むような取組を思案、具体化していきたい。
- 発表内容はとてもよかったのだが、少し早口すぎて内容をスピーディーに理解できにくいところもあり少し残念だった（緊張や時間制限もあったと理解できる）。それでも人と関わるのが苦手になってきた世代の大学生の中にも小さな芽が着実に育っているのかなと思った。
- 学生さんたちの若い力を各地域、田舎の大人が育てる、彼らを成長させる、成長させなければならぬ役割を忘れてる。だから、火を付けていきたい。
- 大人が若さ、力を「生かす能力」を自らもたねばと思った。大人の中にも、年代ごとに下を育てるシステムと気持ちが必要かと思う。
- 以前、大学生と関わったとき、子どもに対する考え方に違いがあり、協力をお断りしたことがある。若い方には柔軟な考え方を期待している。また、私たちは広い枠を準備して、若い方の力をお借りできる機会をもらいたい。
- 地域のまちづくりを考える上で大変参考になった。ぜひ、大学生の若い力の支援をお願いしたい。
- 大学生の若いがんばりにパワーをもらった。いろいろな年代の方とつながりたいと思った。
- 大学生がこのようにがんばっていることを知る機会となった。各所で地域がすたれ、なくなっている現状、根本はやはり少子化だろうか。
- 今後、Muse とつながりたい。今は便利屋としての考え方しかないが、若い知恵と精力がいる。全体の時間配分は、講演を 15 分短くして、その分グループ別協議を増やした方がよかった。
- 積極的な人が多いと思っていたので、全体協議のときもっと意見が出るのかなと思っていたが、出なかったのが意外だった。大人のがんばりがもっと見たかった。若松先生が最後に「新里」という考えを言われたのは、私も考えていたことなのではっとさせられた。
- 同一ホールで 3 グループ協議だったので、個室の方が集中できたと思った。各地区は若い力を必要としている。だが、出会うきっかけがない。定期的交流ができる仕組みを大学で開発してもらいたい。
- たくさん関係者の方々に対し、本当に頭が下がる。社会教育は人と人の縁が何事にも代えがたい財産であり、エネルギーであると考え。私もいい縁をこれからもつなげていけるよう、日々精進していきたい。
- 学びの場はいつ、どこで、誰にとっても必要なもので、その場を数多くもてるのが人間の幸福につながるんだなと思った。身近で活動している方が、地域だけでなく、社会にとっても特別な方だったんだなということに気付き、これから自分も精進していかなければと思った。
- 私は行政側が進めているまちづくりに携わっている。本集会は社会教育（公民館）の立場を推進されているが、市側のまちづくりは関係なかった。

地域教育中予ブロック集会第1回実行委員会の協議結果

28.9.18

1 開催場所

○未定

2 開催日時・日程

平成29年2月18日(土)

12:30 受付

13:00~16:30 事例発表・協議

※500円を参加費(資料代)とする。

3 内容及びテーマ・特色 かかわりをチカラに つながりカタチに

- 高校生、大学生等次代のまちを担う若者にもアプローチ(つなげる)
- 各市町の社会教育主事有資格者への働きかけ(広げる)
- 3つの視点(教育・福祉・まちづくり)で協議(深める)

4 次回(10/16)の実行委員会

- ・管内のボランティア活動サークル等を有する高校、大学(短期大学を含む)との交渉
※参加意思や参加見込み人数の感触等の確認…事務局(中予教育事務所)
- ・会場の検討
- ・参加呼び掛け(実践報告者(団体)を含む)の計画と周知の仕方等

地域教育中予ブロック集会第2回実行委員会の協議結果

28.10.16

1 各大学への参加呼び掛けの状況

愛媛・松山・東雲・聖カタリナ大学の各大学(研究室等)に、本事業の趣旨を理解し参加してくれそうな学生は存在するのか、情報取得に訪問。

訪問先(○)及び訪問予定(●)

○愛媛大学 社会共創学部 井口梓准教授研究室

○愛媛大学 教育学部 山田誠准教授研究室

○松山大学 社会連携事務室

○聖カタリナ大学・聖カタリナ短期大学

○松山東雲女子大学

●愛媛大学 農学部 伊藤和貴教授 桑原まちづくりサークル

●松山大学 Muse

各大学、事業趣旨は理解。具体的な集会の内容がはっきりした段階で周知には協力する。とは言え、学生の発表や参加など実質的なことについては、各大学の研究室(ゼミ)に直接コンタクトをとるか、サークルに当たることが有効であることを実感。

松山市内4大学をリンクする団体4-Rings(フォーリングス)にもあたる。

2 事業内容・開催要領(案)の検討

① 講話(60分程度)

講師候補…高山良治氏 カンボジア地雷処理活動家

富田 敏氏 元地域おこし協力隊

学生にとってインパクトがあり、今後の活動の支えになる内容を提供

② 実践発表(20分×3団体)

候補

○愛媛大学共創学部井口研究室の取組

○柴崎氏の取組

○

③ 協議(20~30分) 協議内容報告(10分)

参加者が発表のあった内容から、協議に参加してみたいグループを選択

3 開催場所 にぎたつ会館 芙蓉の間

4 参加呼び掛けの計画(周知の仕方等)

市町教委行政職者、学コミ関係者、社教主事有資格者(教職員)、大学、まちづくり団体

チラシ原案を作成し、次回実行委員会から検討していく。

地域教育中予ブロック集会 第3回実行委員会協議結果

28.11.14

1 開催要領(案)について

【趣旨】

- ・「若者たち」の表記について→「新・旧若者たち」でインパクトをつける。
- ・文末「奨励し…」のくだりについて→「共に…」が強調されるようにする。

【講演】

- ・案のとおり「らくさぶろう」にお願いする。
- ・講演テーマ・演題については、講師の自分さがしの話など学生たちにとって身近なテーマでお願いする。

【実践発表】

- ・実践発表者については、案のとおりで依頼を進める。
- ・ファシリテーターについては、次のとおり依頼する。
 - 愛大の発表を愛大社会連携推進機構教授 前田真 氏
 - 松大 Muse の発表を愛媛ボランティア学習研究会事務局長 柴崎あい 氏
 - 愛大教育学部宇津さんの発表を双海町松本 宏 氏
- ・発表者の発表内容が固まったらファシリテーターに事前打合せをお願いする。

2 チラシ(案)の検討

- ・講師の写真は原案ほど大きくなくてよい。→もう少し小さくする。
- ・ファシリテーター名だけでなく、発表者の団体名、名前、活動等も入れる。
- ・申込みアドレスはもっと見やすくなるよう工夫する。
- ・主催は「中予ブロック集会実行委員会」。共催は「地域教育実践交流集会実行委員会」。後援は「愛媛県」、「愛媛県教委」、「えひめ教育の日推進会議」でよいか地域教育実践交流集会実行委員会の確認を取る。
- ・配布先について
 - 松山市内のまちづくり協議会については松山市役所鍵山氏に依頼する。
 - ボランティア活動に取り組んでいる高校生に配布する。ヤングボランティアセンターに配布を依頼する。
 - アーバンデザインスクールにも情報提供する。
- ・配布時期については、年内に作成し年明けに配布する。

3 当日の実行委員の役割分担

- ・受付…………… 遠藤、谷川
- ・全体進行…………… 小笠原、武智
- ・記録(講演・3グループ)…………… 遠藤、谷川、大森(講演も含む)
- ・写真…………… 山口
- ・動画撮影…………… 鶴久森

4 第4回実行委員会について

- ・平成29年1月31日(火) ※参加申込みの締切日
- ・開催場所
- ・検討内容…参加者が足りない場合のテコ入れ先等の協議
運営についての共通理解を図るため、ファシリテーターにも第4回実行委員会への参加を依頼する。

地域教育中予ブロック集会第4回実行委員会の協議結果

29. 1. 31

1 参加申込みの状況について

- ・ 1/31現在、約50人
- ・ 実行委員が何人かずつ呼び掛け（目標100人）
- ・ 益田市への働きかけ→真鍋さん
- ・ 大学等への働きかけ→社会共創学部（井口研究室ほか各実行委員が個々に）

2 発表内容(概要)と協議の進め方

- ・ アンケート→修正点（実践発表に対する評価とグループ協議に対する評価が必要）
- ・ 2/6に発表レジュメ→ファシリテーターへ送付
- ・ パワーポイントデータが提出され次第、ファシリテーターへも送付
→データは発表用PCにダウンロード。
※修正点が出たものについては当日上書き。
- ・ 今後、ファシリテーターが発表者と連絡を取り合う。
- ・ グループ別協議は、学生を地域づくりに引き寄せるところ、周りからのサポートの重要性を認識させるところ、課題に思うことなどを中心に意見を引き出す。
- ・ ホワイトボードを用意

3 役割確認及び経費

【役割等】

- ・ 実行委員は11:00集合→にぎたつに昼食注文→事務局
(12時過ぎに会場入りの前田先生には、おにぎり等を用意。)
- ・ 発表者は個々に食事を済ませ、12:20までに集合し、発表準備・確認を行う。その後、にぎたつ会館2階ロビーでファシリテーターと打合せ。
- ・ 全体司会のコンテ→小笠原さんが作成し、武智さんと調整。

【経費等】

- ・ 前田先生への謝金については、愛媛大学へ兼業申請→事務局
- ・ 益田市の参加者については、旅費の用意。
- ・ らくさぶろうさんの謝金は、謝金規定により10,000円にする。
- ・ 一般参加者の500円の使い道
→参加者へのおみやげ等として全部使う。にぎたつ会館での飲食はできない。購入物を事務局で検討し、武智さん、谷川さんに購入を手伝ってもらおう。

4 反省会について

- ・ 日 時：2/18(土) 18:00～ 場所：チャイナ白魂
- ・ 参加者：実行委員、ファシリテーター、発表者及び発表関係者、地域教育実践交流会実行委員、事務局
- ・ 会費は3,500～4,000円
- ・ 発表者の学生は、2,000円
- ・ 実行委員等へ出欠の確認→事務局